

- 02 キラリ★くわな人
- 03 特集 伝統を未来へとつなげたい
思いが詰まった多度祭
- 08 令和5年度 桑名市の予算
- 10 今年度は桑名市の移住支援・子育て施策がすごい!
- 13 ~桑名の未来を見据えた組織へ~
4月から市の組織・機構が変わりました
- 14 子育て広場
図書館・六華苑・博物館
- 16 メディカルニュース
くわな防災教室
- 17 かんたん旨レシピ
みんなの掲示板

- 18 EVENT ALBUM(イベントアルバム)
- 20 くわなINFO
- 28 無料相談
- 29 桑名フィルムコミッション
市長まちなか探索
- 30 HAPPY BIRTHDAY
桑名のイトコ教えてください。

今月の表紙

今月の表紙は4年ぶりに開催される多度祭。馬が坂を駆け上がる瞬間、会場の熱気はピークに。この感動は地区の人たちの思いが詰まっているからこそです。



多度祭

多度祭とは？

多度大社の御例祭を一般的に「多度祭」と呼んでいます。多度祭では、急斜面の坂を馬が駆け上がり、その上がった数で豊凶を占う上げ馬が行われます。今から約700年前の南北朝時代に起源があるとされ、織田信長の焼き討ちで一度は中断されたものの、桑名藩主の本多忠勝によって復興されました。令和2年から3年間、コロナ禍により中止されていましたが、今年はコロナ対策を徹底した上での開催が決定しました。上げ馬は御厨と呼ばれる多度大社周

問 秘書広報課(☎24・1492 FAX 24・1119) 写真提供:多度大社ブログ

多度大社の御例祭、通称「多度祭」。その祭りの一つ「上げ馬」はコロナ禍により中止になっていましたが、今年4年ぶりの開催が決定されました。伝統を正しく受け継ぎ未来へつなげる氏子地区の人たちが奮闘する様子を紹介します。

辺の氏子7地区(肱江・多度・小山・戸津・北猪飼・猪飼・力尾)により奉納されます。神児1人は肱江地区から、乗り子(騎手)6人はその他の地区から1人ずつ選出されますが、1カ月間の訓練や練習の手助け、馬の世話、祭りに必要な「ブチ」などの準備は地区の青年会で行い、全員で上げ馬に臨みます。馬が坂を上る時、乗り子と地区の人たちの緊張と興奮はクライマックスに。その熱気が、全国から見物客を呼び寄せるゆえんかもしれません。



須賀の馬場で流鏝馬神事(馬に乗って弓を射ること)も行われます。

DATE

とき 5月4日(祝)、5日(祝)
場所 多度大社
(多度町多度1681)



詳細のスケジュールは、多度大社ホームページをご確認ください。

キラリ★くわな人



株式会社ダイマル
たくろう
西塚 卓郎さん

後継者が家業を生かした新規事業アイデアを発表する中小企業庁主催の「アトツギ甲子園」。西塚さんは192人のエントリーの中から15人だけが進む決勝大会に挑みました。優勝は逃したものの、たくさんの刺激があったそうです。

西塚さんが発表したのは、木の再利用を中心に、地域のひとと大工をつなぐアイデア。住宅資材を工務店や大工に卸す仕事をしている西塚さんは、現場で捨てられる木を目にし、「まだ価値があるの」と感じていたそうです。

そこで、解体予定の現場などで木材の救出をスタート。救出してきた古材は、玄関のドアや店舗のカウンターなどに变身させ、新たな命を吹き込みます。「古材ならではの風合いを好む人が想像以上に多く、会社の倉庫で古材や家具の販売イベントを行ったところ、800人も人が来場してくれました」と西塚さん。

「イベントで知り合った人たちと地域の工務店・大工さんをつなぎ、地域で循環するようにしていきたい。そして地元を元気にしていきたいです」と話してくれました。写真は古材・古道具の店「tsunagi」。



「地域が一体となる 貴重な機会です」

ハナウマ 猪飼地区
区長 近藤 敏春さん(左) / 青年会 水谷 大樹さん(右)

今年ハナウマ(一番初めに坂を上がる地区)を務める猪飼地区。皆さん、さぞかし楽しみかと思いきや、「不安な気持ちもある」と打ち明けてくれました。「猪飼は前回の上げ馬を欠席しているので5年ぶり。馬の扱いも久しぶりで、生き物相手なので毎回同じわけにはいかない。やっと再開できるという気持ちと、うまくいくか不安な気持ちもあります」と近藤さん。

それでも続ける理由とは? 「物心ついたときから上げ馬があるのが当たり前。自分が乗り子になったときは、地区のみんながサポートをしてくれて、感謝の気持ちしかありませんでした。次は自分がサポート役にまわり、恩返ししたい」と話してくれたのは、青年会に所属する水谷さん。地域のコミュニティが希薄になりつつある現代において、上げ馬は住民が一体となる貴重な機会をもたらしているようです。



「胸が騒ぎ、
血が躍るのが
多度祭!」

小山地区 区長 小林 恵さん

16歳で乗り子になって以来、できる限り上げ馬に関わってきたという小林さん。中止になった際は「仕方ない」という気持ちだったものの、3年間も続くとは思っていませんでした。今年は「どうやったら開催できるのか」という話し合いを御厨会で続けてきました。「胸が騒ぐ、血が躍る」と小林さんが表現する上げ馬の魅力は、参



つなげたい。
底にあるもの

続けたい。
その思いの根

各地区は準備に大忙し。
安や大変さもあります。
お聞きしました。

4年ぶりの祭り開催となり、
口伝で続くからこそその不
それぞれの思いを



「全地区揃って
再開できるのは
喜ばしいこと」

多度大社 権禰宜 増田 秀磨さん

令和2年から、多度祭における上げ馬に関わる行事を全て中止している多度大社。前ページで紹介したように、いつとき途絶えたことはあるものの、約700年続いてきた祭りであり、その中止の決断を下すのは、並々ならぬものがあつたそうです。

そんな中での再開が決まり、増田さんに心境を伺うと「純粋にうれしいですね。しかも今回は、全地区が揃って奉納していただけるのと、喜ばしい気持ちでいっぱいです」とのこと。最後まで祭りをやり遂げるためにも、御厨と連携・協力しながら感染対策をしっかり行い、気を引き締めて準備を行っています。「上げ馬神事は三重県の無形民俗文化財です。三重県の祭りですから、市民の皆さんはぜひ一度見に来ていただければと思います」と話してくれました。



加した経験があるからこそわかることとあります。

乗り子経験者はほぼ青年会に参加しています。青年会は15〜24歳の人で構成されており、乗り子の練習の手助けや馬の世話など、上げ馬行事における「縁の下の力持ち」。彼らがいなければ祭りは存続できません。が、一方で青年会に所属しない若年世代も多く、地域の伝統を途絶えさせないための取り組みが求められています。

「光栄です。
最後までやり遂げたい」

ハナウマ乗り子 前田 綾太さん

4月1日の神占式でハナウマの乗り子と決まった前田さん。実は、平成30年の多度祭でも乗り子を務めています。とはいえ、乗るのは5年ぶり。中止が続いていた期間は、再開できるのかという不安や、馬の世話の方法などを忘れてしまうのではないかと心配でいっぱいだったそうです。「多度祭が再開できると聞いて、率直にうれしく思いました。さらに乗り子に決まって光栄に思う気持ちと同時に、2回目ではありますが、やはり『怖い』という気持ちもあります。でもそれ以上に、『なんとしてもやり遂げなければ』と使命感でいっぱいです。自分だけではなく、みんなががをすることなく無事に終わりたい」と話します。

乗り子はいわば、地区の「顔」。地区の恥とならないよう、しっかりと精進して本番を迎えると意気込みを語ってくれました。



上げ馬 成功への道のり

上げ馬神事は、1794年に書かれた「大祭御神事規式簿」とほぼ変わらない姿で受け継がれています。まず4月1日に「神占式」で神児と乗り子を選出。その後、馬乗り子、青年会が揃ってお祓いしてもらい、1カ月間

の練習がスタートします。昼間は学校や仕事があるので、祭りの準備は早朝あるいは夜。朝4時半から乗り子の練習を行い、夜はブチや花笠(乗り子がかぶる衣裳作り、和鞍の組み直しなどを青年会全員で行います。

もちろん馬の世話も自分たち。3〜4週間の練習の後、馬主の前で奉納してもらおう馬に乗り、練習の成果を披露する「乗り上げ」を行います。これ以降は馬に乗ることなく、厳しい精進生活に入り祭り当日を迎えます。

坂というより「壁」のような急斜面。坂づくりは多度地区消防団の役目。



4/1 神占い

各地区代表の青年たちが神占式に参列。神児と乗り子が御籤によって選ばれます。御籤が開かれ、いよいよ多度祭が始まります。



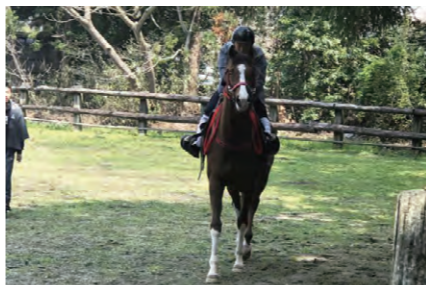
4/2 お祓い

練習に入る前に馬や乗り子、青年会が揃ってお祓いを受けます。乗馬経験がない乗り子が多いため、初日は歩くことから。馬上は思った以上に高い!



4/3~ 馬の世話、練習

餌やりからシャンプー、厩舎の清掃まで、全て青年会のみで行います。祭りに必要な道具類なども準備が必要。やることは山積みです。



4/25 乗り上げ

練習の切り上げ時には、「乗り上げ」と呼ばれる馬主に練習の成果をお披露目があります。その後、祭りの安全と上げ馬成功を祈念します。

上げ馬 舞台裏

祭馬の取扱いに関する講習会

安全に祭りが行われるよう、馬の取り扱いに熟知した講師を招いた講習会を毎年開講しています。上げ馬に関わる人が多数参加し、馬の体調管理の方法や接し方など、馬と良好な関係が結べるよう、講義と実技の両面から学びます。実技では和鞍の付け方や取り扱い方からはじまり、ベルトの締め具合など細かく指導が入りました。



精進部屋

祭りが近づくくと、乗り子は多度大社でお祓いを受け、各地区の集会所に作られた精進部屋に入ります。精進部屋は注連縄を張り巡らせた2畳ほどのスペース。風呂は入らず、朝と晩に多度大社本殿横の川で水ごおり(禊)を行い、身を清めます。食事は乗り子自身か、特定の人が煮炊きしたものだけを食べる別火生活を経て、当日を迎えます。



坂作り



道具作り

乗り子がかぶる花笠をはじめ、さまざまな道具の製作・修繕も必要な準備です。猪飼・北猪飼・力尾はクジャク、多度・小山は松竹梅、戸津は菖蒲の花笠といった具合に、花笠や衣装は各地区によって色やデザインが受け継がれています。ほかにも寄付を頂いた人に記念に渡すブチや、手綱、矢などの道具類、和鞍や鐙の修繕といった準備があります。また、祭りの際に馬をつないでおく馬小屋や、棧敷席も自分たちで作ります。



毎年5月2日に行われる坂作りは、多度地区消防団の大仕事。前回の祭り以来放置されていた坂に土を補充して坂を作り直します。土を固めるのは今でこそ重機を使用しますが、その他は手作業という重労働。昔は全て手作業だったと思うと…。1日ばかりで作る上げ、御幣がつけられます。新しく築かれた坂は高く、そのままでは馬は上がれないため、5月4日の「坂爪掛(さかづめかけ)」で御幣を取り坂の中央部を削ります。